

「複他動詞・他動詞」交替の統語構造と語形成¹

とのさき すみこ
外崎 淑子

東海大学

日本語の形態的に対応する「複他動詞・他動詞」交替には、「預ける・預かる」のように「<与え手>が<受け手>に<もの>を V」「<受け手>が<もの>を V」となるものがある。本稿ではこうした「複他動詞・他動詞」交替には、「預ける・預かる」タイプのように、両者が同じ事象で視点を変えただけのものと、「かぶせる・かぶる」タイプのように、両者の事象が独立したものの2種類があることを明らかにし、それらの統語構造を提案する。どちらのタイプも単独述語であっても複雑統語構造を持っているのだが、「預ける・預かる」タイプは、複他動詞構造と他動詞構造は平行的で、ただ *v* の外項素性と、追加項を導入する主要部(Applicative head) の与格素性のみが異なる。一方、「かぶせる・かぶる」タイプは、 \sqrt{P} までが共通構造であり、それ以上が異なる構造であることを示す。

1. 2タイプの「複他動詞・他動詞」交替

Matsuoka (1999)は、日本語には2つのタイプの形態的に対応する「複他動詞・他動詞」交替があることを観察している。まず1つ目は、(1ab)の「預ける・預かる」のように、複他動詞から動作主の項を落として他動詞とする時「受け手」が主語となるもので、もう1つは、(2ab)の「渡す・渡る」のように、他動詞とする時「もの」が主語になるものである。

¹ 本稿は、外崎(2003)の4章1節の一部と日本言語学会第126回大会での発表に加筆修正したものである。

- (1) a. [複他] 太郎が花子に本を預けた。
 b. [他] 花子が本を預かった。 (cf. *本が花子に預かった。)
- (2) a. [複他] 太郎が花子に本を渡した。
 b. [他] 本が花子に渡った。 (cf. *花子が本を渡った。)

「預ける・預かる」タイプには、他に「浴びせる・浴びる」「教える・教わる」「賜う・賜る」「貸す・借りる」「かぶせる・かぶる」「着せる・着る」「見せる・見る」等が、また「渡す・渡る」タイプには、他に「返す・返る」「届ける・届く」「伝える・伝わる」「ぶつける・ぶつかる」「当てる・当たる」「落とす・落ちる」「戻す・戻る」等があると Matsuoka は挙げている。

本稿では、Matsuoka がその「複他動詞・他動詞」交替のパタンから、「預ける・預かる」タイプを1つのものとして分析したのに対し、この種の動詞は実は2種類に分けられることを示し、その統語構造と語形成のしかたについて論ずる。「渡す・渡る」タイプとの違いについては深く立ち入らないが、次節で簡単に Matsuoka 分析をまとめておく。

2. 「預ける・預かる」タイプと「渡す・渡る」タイプ

Matsuoka (1999) は、「～に預ける」と「～に渡す」とでは「～に」の範疇が異なることを「分裂文」と「二次的述語」のテストから論じ、「預ける」タイプの「に」は構造格であり、「渡す」タイプの「に」は後置詞であるとしている。また、「<与え手>が<受け手>に<もの>を V」の「受け手」と「もの」の統語上の位置関係について、変項束縛、作用域解釈を使ってテストしており、「預ける」タイプの場合は「受け手」が「もの」よりも非対称的に高い位置（「受け手」が VP の外、「もの」が VP 内）にあり、「渡す」タイプの場合は、「受け手」と「もの」が統語的に同じ高さ関係（両者とも VP 内）にあるとしている。また、「預ける」タイプは「受け手」に動作主性があるが、「渡す」タイプにはそれが無いとしている。以上のことから Matsuoka は、「預ける・預かる」タイプに(3a)の構造を、「渡す・渡る」タイプに(3b)の構造を提案して

いる。

- (3) a. [_{VP} 太郎が_i [_{VP} 花子に [_{VP} 帽子を かぶせる]_v]_v]
 [_{VP} 花子が_i [_{VP} 帽子を かぶる]_v] 「預ける・預かる」タイプ
 b. [_{VP} 太郎が_i [_{VP} 本を [_{PP} 花子に] 渡す]_v]
 [TP 本_iが_i [_{VP} [_{VP} _{t_i} [_{PP} 花子に] 渡る]_v]] 「渡す・渡る」タイプ

「渡す・渡る」タイプの構造は後置詞句の「～に」の存在を除けば、2項・1項の他動詞・自動詞（「壊す・壊れる」等）と平行的な構造である。本稿では、「渡す・渡る」タイプの構造としては Matsuoka の分析をそのまま踏襲する。Matsuoka の分析で画期的な点は、「預ける・預かる」タイプの複他動詞に(3a)のように _{vP} の2階建て構造を仮定している点である。単独述語に複文的な二重主語構造を仮定し、複雑な統語構造としている点が、Hale and Keyser (1993)の単独述語に複雑構造を仮定する方向性とも合致する。本稿では二重主語構造は採用しないが、Matsuoka が可能性を探ったように、項を導入する主要部を複数仮定する構造の可能性を考えていく。そのために、まずは「預ける・預かる」タイプの特徴をより詳しく検討していく。

3. データ再考

前節では Matsuoka(1999)の分析を概観したが、Matsuoka が挙げた「預ける・預かる」タイプは実はさらに2種類に分けられることをこの節では見ていきたい。これらは「預ける・預かる」タイプ（他に「教える・教わる」「賜う・賜る」等）と「かぶせる・かぶる」タイプ（他に「着せる・着る」「見せる・見る」等）に分けられるというのが本稿の主張である。ではまず両者の相違点をまとめていこう。

まず複他動詞文を他動詞文にした場合、複他動詞文の動作主が、対応する他動詞文に「<与え手> から」として生起可能か否かについて、両

者に違いがある²。「預ける」タイプは(4b)に見るように、「～から」の生起が可能であるが、「かぶせる」タイプは(5b)に見るように、「～から」の生起ができない。

- (4) a. [複他] 太郎が花子に本を預けた。
b. [他] 花子が (太郎から) 本を預かった。
- (5) a. [複他] 太郎が花子に帽子をかぶせた。
b. [他] 花子が(*太郎から) 帽子をかぶった。

次の相違点として、複他動詞文と他動詞文の意味関係がある。「預ける・預かる」タイプでは、他動詞の事象が成立していれば必然的に複他動詞の事象も成立している。例えば、「預かる」という事象は「預ける」という事象を視点を変えて表したものであり、両者の事象は表裏一体のものである。一方、「かぶせる・かぶる」タイプの場合、他動詞の事象の成立に複他動詞の事象の成立は必要ではない。「かぶる」という事象は「かぶせる」という事象と独立して起こりえるものである³。

次に両者の共通点を挙げる。「預ける」タイプ「かぶせる」タイプともに、「～に」が「～を」よりも構造上高い位置にあるという点である。ここでは、作用域解釈の例を挙げる。

² 「私{が/から} 花子に伝えます」などの「が/から」交替の研究には、データ観察として伊藤 (2001)が、LCS 的な分析として井上 (2002) がある。両者に基づき Ueda (2002) は、「太郎{が/から}花子に本を預ける」「花子が太郎から本を預かる」の構造の分析を提案している。

³ もう1つの相違点として、「預ける」タイプの「～に」には動作主性がないが、「かぶせる」タイプの「～に」には弱い動作主性が認められるという点がある。しかし、これは「～に」が構造上、動作主の意味役割を得ているためとは考えられない。「かぶせる」や「見せる」の「～に」に見られる弱い動作主性は、「<人>を<場所>にいれる」「<人>を<場所>に/から だす」等の「<人>を」の項にも同じように見られるものである。ゆえに、これらの動作主性は√の性質によるものであり、構造に依存するものではないと本稿では考えている。

- (6) a. 太郎が誰かにどの本(を)も預けた⁴。 誰か>どの本/*どの本>誰か
 b. 太郎が春子か夏子に大半の本を預けた。 春か夏>大半/*大半>春か夏
 (7) a. 太郎が誰かにどの帽子(を)もかぶせた。 誰か>どの/*どの>誰か
 b. 太郎が春子か夏子に大半の帽子をかぶせた。 春か夏>大半/*大半>春か夏

「預ける」タイプの(6ab)も、「かぶせる」タイプの(7ab)も、「～に」が「～を」よりも広い作用域を取る解釈しかない。ということは、どちらも「～に」は「～を」よりも構造上高い位置に生起するということになる。「～を」は内項として VP 内に基底生成すると考えられるため、「～に」は VP よりも高い位置に生起すると言える⁵。

4. 本稿の提案：統語構造と語形成

以上のデータ観察より、「預ける・預かる」タイプと「かぶせる・かぶる」タイプの統語構造を本稿で提案する。まず、本稿が提案する述語の統語構造は、Hale and Keyser (1993) の「適切な述語項構造の表示はそれそのものが統語構造である ("the proper representation of predicate argument structure is itself a syntax." (p. 53)) 」という考えに基づく。Hale and Keyser は単独述語であっても複雑な統語構造を持つと仮定しており、その仮定の下、英語の脱名詞動詞(denominal verb) などを分析している。本稿でも「預ける・預かる」「かぶせる・かぶる」という単独述語に複雑な構造を仮定する。データの根拠としては、「預ける」という動詞には動作主、受け手、対象の3つの項があるが、それらは作用域解釈より、非対称的に「動作主>受け手>対象」という高さ関係となっている。動作主が VP の指定部に、対象が VP の指定部に生起するとすれば、「受け手」はその間の何らかの主要部によって構造に導入されなければなら

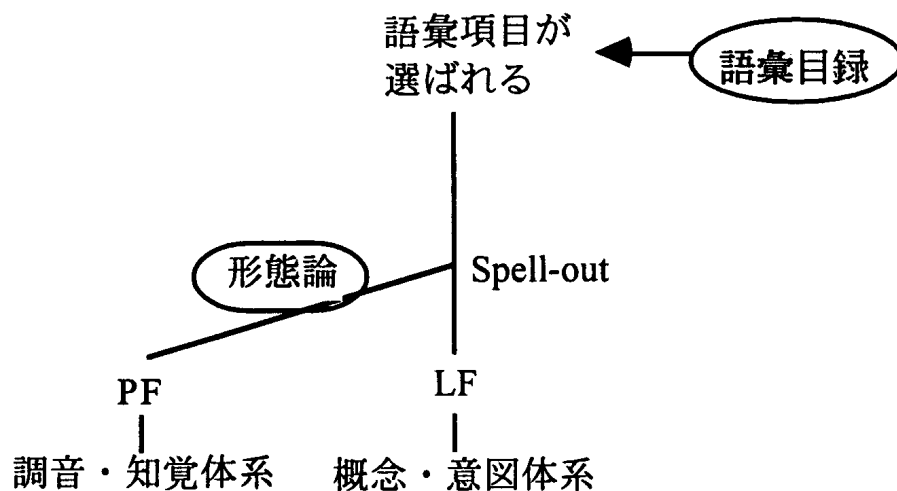
⁴ 「どの本をも」のように「をも」という音の連続自体が許容できないという話者もいるが、「すべての本を」とすると、「すべて」に分配性がないと判断する話者もいるため、やや不自然ではあるが、「～をも」の例を挙げた。

⁵ 本稿、及び先行研究の Matsuoka (1999) は Aoun and Li (1993) 他 の m-command による作用域決定を採用している。

ない。そのためには「預ける」という単独述語に、[_vP <動作主> [_xP <受け手> [_{VP} <対象>]_x]_v] といった複雑な構造を仮定せざるを得ない。

次に、本稿では語形成に拡散形態論 (Distributed Morphology: Halle and Marantz 1993 他) の枠組みを採用する。拡散形態論は、(8)の極小主義統語論の文法体系と合致する形態論である。拡散形態論では、語彙項目が持つ素性は意味素性、形式素性のみで、音韻素性は含まれない。音韻情報は Spell-out 以降に挿入され、それによって語形成が行われる。つまり、「預ける」「預かる」といった「語」は統語以前に作られるのではなく、統語構造完成以降の音韻挿入によって得られるという仮定である。

(8) 極小主義統語論 (Minimalist Program) の文法体系



また、項の導入については、Pylkkänen (2002)の考えを取り入れる。Pylkkänen は、動詞の項の他に文に入ってくるある種の必須要素（追加項）を、何らかの主要部が構造に導入するとし、その主要部として applicative というものを仮定している。Pylkkänen は、applicative には high applicative (VP より上位に生起)、low applicative (VP より下位に生起) があると仮定している。追加項が事象(event)と結びついて導入される場合は high applicative、事象の参与者(individual)との結びつきで導入される場合は low applicative による導入である。例えば、Pylkkänen が日本語の high applicative の例として挙げているのは、(9)のような間接・被害

受身(gapless passive)であり、low applicative の例として挙げているのは、(10)のような「～に」が「～を」の受け手となる2重目的語構文である。以下、下線が applicative によって導入された追加項である。

(9) 太郎が花子に新興宗教を始められた。

(10) 太郎が花子に手紙を書いた。

high/low applicative の見分け方として、Pylkkänen は非能格自動詞（目的語のないもの）との共起可能性を挙げている。非能格自動詞と共起できる追加項は high applicative によって導入され、それと共起できない追加項は low applicative によって導入されるとしている。(9)(10)それぞれ、非能格自動詞文において、(11)が可能、(12)が不可なことから、前者が high applicative、後者が low applicative であるとしている。

(11) 太郎が花子にうるさく走られた。(cf. 9)

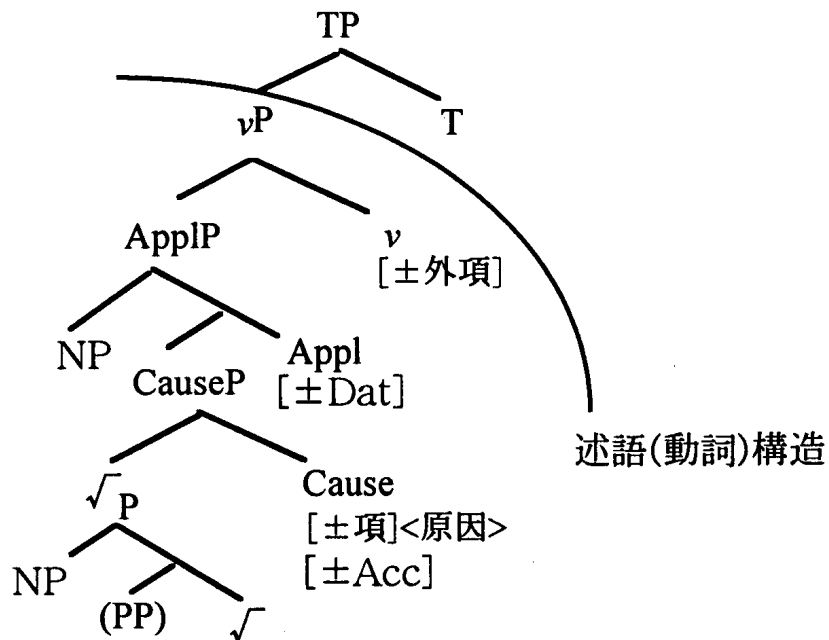
(12) *太郎が花子に走った。(cf. 10)

では、本稿が扱う「預ける」「かぶせる」の「～に」はどうなるだろうか。ここで問題となるのは、「預ける」「かぶせる」の「～に」はこれらの動詞の項であり追加要素ではないということである。ゆえに、非能格自動詞のテストは使えない。では、Pylkkänen の分析はこれらの動詞には使えないのかということになるが、「～に」が動詞の項である以上、何らかの主要部によってこの項が構造に導入されると考えることが妥当である。 $\sqrt{\quad}$ の指定部には「対象」の項が生起すると仮定しているため、(6ab)(7ab)に見るような作用域解釈のデータを説明するためには「～に」は \sqrt{P} よりも上位に、何らかの主要部によって導入されなければならない。必須項ゆえに新たな主要部を立てるという分析と、それらも追加項と同じく applicative が導入すると仮定する分析がありうるが、本稿では後者の可能性を探ってみたい。

次に、 \sqrt{P} 以上 TP 以下の構造についてだが、本稿では \sqrt{P} 以上 TP 以下も述語の情報が反映される構造であるとの仮定を採用する。 \sqrt{P} 以上 TP 以下は単純な vP 構造ではない。使役事象を導入する Cause、追

加項を導入する Appl(icative)、外項の有無等を決定する v といった主要部が存在する。 \sqrt{P} 以上 TP 以下の構造として理論上可能な日本語の統語構造は (13) である。

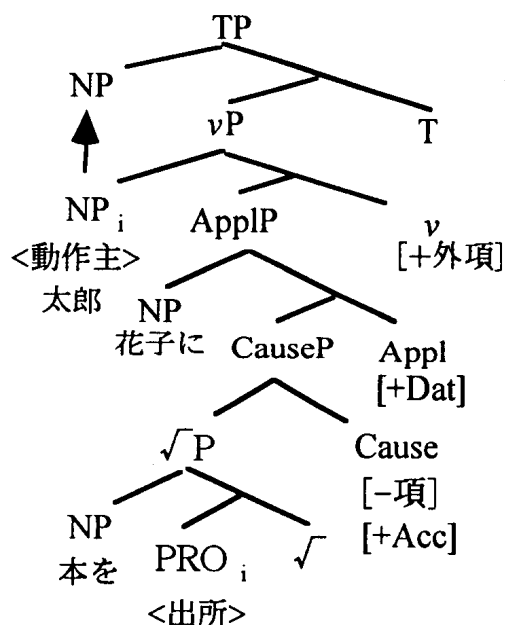
(13) 日本語の述語統語構造 (外崎 2003)



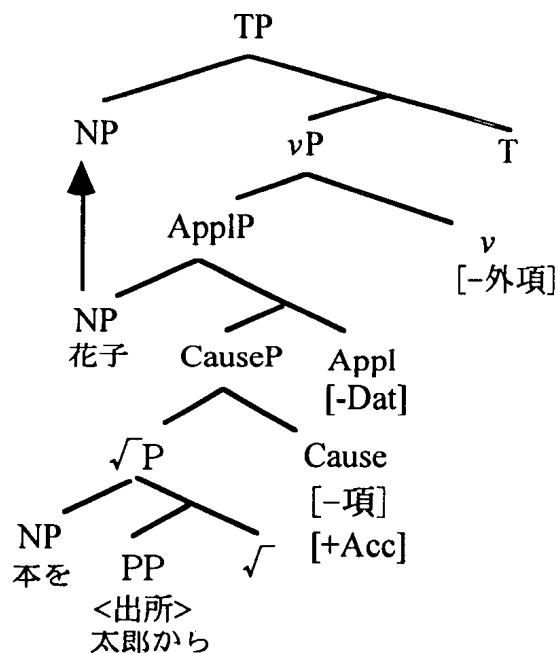
\sqrt{P} は範疇に中立な述語内部構造であり、すべての述語に存在する。Cause と Appl は任意の主要部である。Cause は使役事象を導入する他に、対格付与素性、項の有無に関わる素性があるが、Appl は追加項の導入に関わる主要部であるため、項を導入しない Appl は存在しない。 v は動詞には必須の主要部であり、動詞という範疇素性と状態性に関わる素性、外項の有無等を決定する素性がある。

以上の仮定を元に本稿が提案する統語構造を示すと「預ける・預かる」「かぶせる・かぶる」は(14ab)(15ab)のようになる。

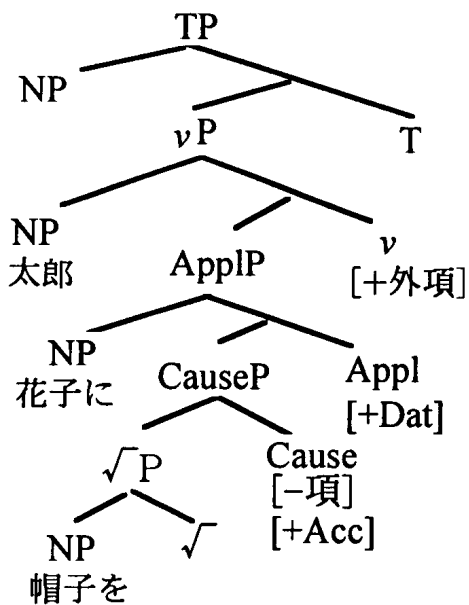
(14)a. 預ける(azuk-e)⁶



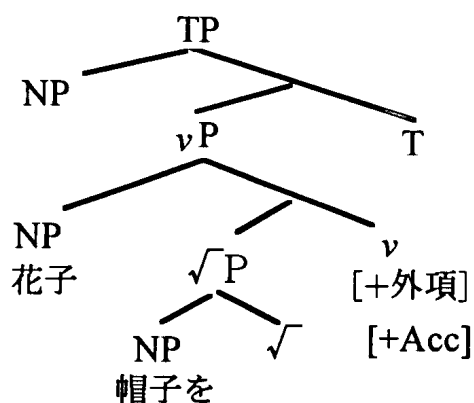
b. 預かる(azuk-ar)



(15)a. かぶせる(kabu-se)



b. かぶる(kabu-r)



⁶ \sqrt{P} の補部に位置する PRO は、主語位置に現れる空範疇としてではなく、動作主「太郎」に語彙的に束縛され、音形としては現れないものとして用いている。

(14a)は「預ける」の構造だが、受け手の「花子」は Appl によって導入されると仮定する。このように「受け手」を Appl の項として導入することで、 \sqrt{P} 内の「もの」との高さ関係がうまく説明できる。また、「預かる」が任意に出所の「～から」を取った場合には、(16ab)に見るように「～から」と「～を」の作用域解釈が二義的となることも、(14b)の構造から説明がつく。

(16) a. 太郎が誰かからどの本(を)も預かった。誰か>どの本/どの本>誰か

b. 太郎が何かをどの人からも預かった。何か>どの人/どの人>何か

(14a)において、この「花子に」の「に」は Appl が与格として与えると仮定する。(14b)は(14a)と平行的な構造だが、(14b)では v は[+外項]素性を失い Appl も[+Dat]素性を失っていると仮定している。これにより格を持たない「花子」が派生主語として TP の指定部に入る。「預かる」が「*預かられる」のような直接受身とならないこともこの主語が派生主語であることから説明できるであろう（三宅智宏氏による指摘）。(14a)と(14b)の構造の関係は、能動文と直接受身文の関係（[+外項]素性を失いそれと連動して[+Acc]素性を失う点）と類似している。「預ける」「預かる」にこのような能動文と直接受身文の関係と類似した関係があるとしたことは、「預ける・預かる」タイプの複他・他動詞対の他動詞が「預かる」「教わる」「賜る」のように-ar という受身動詞の-(r)are を想起する形態素を持つことと⁷、また能動文と直接受身文の関係同様、両者同じ事象の視点を変えた表現であることと関係するためと本稿では考えている。

一方、「かぶせる」と「かぶる」の構造では(15ab)に示したように、両者の共通点は \sqrt{P} のみである。両者の事象が独立したものであることから、 \sqrt{P} より上位に共通性のない両者の構造を仮定することは妥当

⁷ 「預ける・預かる」タイプの他動詞は-ar という形態素を持つ場合が多いという一般化は可能であるが、「預かる」タイプであれば必ず-ar という形態素を持つのではなく、また-ar という形態素を持つ動詞がどれも「預かる」タイプの動詞というわけでもない。動詞の形態素と意味のずれについては、ある程度の一般化はできて例外が多い。

であると考えられる。また「かぶせる・かぶる」タイプの3項動詞が「かぶせる」「着せる」「見せる」など、-se という使役動詞の-(s)ase を想起する形態素を持つことも特徴的である。

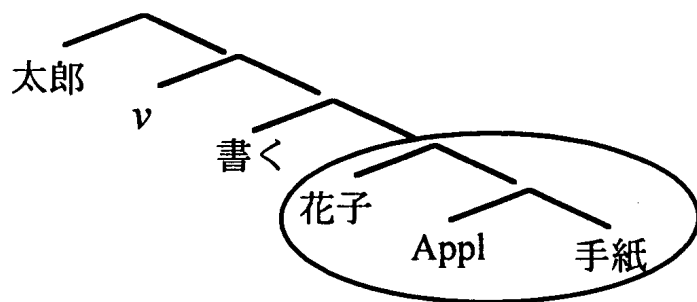
ここで Pykkänen (2002)の分析と比較検討してみよう。Pykkänen は、日本語の low applicative の例として、(10)のような2重目的語構文を挙げている。「預ける」「かぶせる」は意味的には「もの」の移動によって「～に」が所有者となるという点で、(10)の2重目的語構文に近いように一見思われる。しかし、(10)のような2重目的語構文は、前節でも述べたがその「～に」は動詞に必須の要素ではないのに対し、「預ける」「かぶせる」の「～に」は必須要素(項)である点が大きく異なる。また、「～に」と「～を」の関係であるが、(10)のような2重目的語構文では、(17abc)に示すように「～に」と「～を」の語順を変えると落ち着きが悪くなるのに対し、(18ab)に見るように、「預ける」「かぶせる」の「～に」「～を」は語順を入れ替えても許容度は落ちないという違いがある。このように「～に」と「～を」で語順の入れ替えがしにくいのは、任意の所有者を持つ「<人>に<もの>を{書く/買う/作る}」等の2重目的語構文だけの特徴であり、「渡す」「送る」のような3項動詞も(19ab)に示すように、語順の入れ替えには問題がない。

- (17) a. 太郎が花子に手紙を書いた。=>?太郎が手紙を花子に書いた。
b. 太郎が花子に時計を買った。=>?太郎が時計を花子に買った。
c. 太郎が花子に弁当を作った。=>?太郎が弁当を花子に作った。
- (18) a. 太郎が花子に本を預けた。=>太郎が本を花子に預けた。
b. 太郎が花子に帽子をかぶせた。=>太郎が帽子を花子にかぶせた。
- (19) a. 太郎が花子に本を渡した。=>太郎が本を花子に渡した。
b. 太郎が実家に荷物を送った。=>太郎が荷物を実家に送った。

Pykkänen は具体的な日本語の2重目的語構文の構造は例示していないが、彼女が仮定する low applicative の構造からして概略(20)のようにな

るだろう⁸。

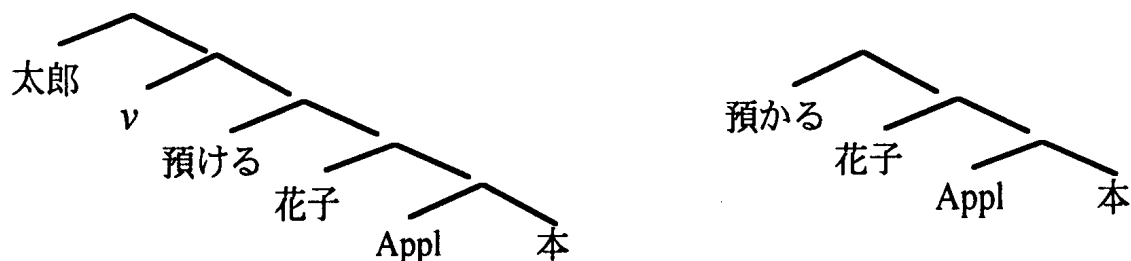
(20) 太郎が花子に手紙を書く。



(Pylkkänen 2002: 19 を参考にした)

「花子に」と「手紙を」が両者 Appl の項として生起する構造なのだが、このような low applicative の構造では語順の入れ替えがしにくいようである。こうした違いがあるため、「預ける」の「～に」を low applicative による導入とは考えにくいのだが、仮に「預ける」の「～に」も low applicative による導入であると仮定し、「預ける」と「預かる」が平行的な構造であるとすれば両者は(21ab)の構造となるだろう。

(21)a. 太郎が花子に本を預ける b. 花子が本を預かる。



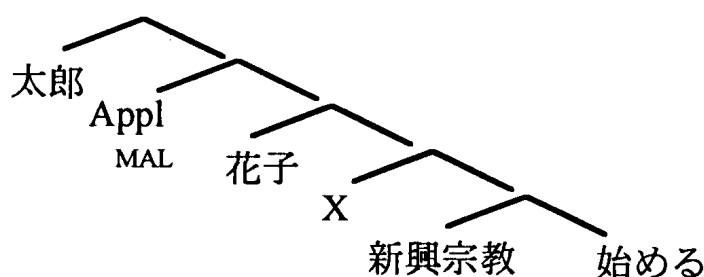
(21b)のような構造では移動の出所となる要素を構造に現すことができない。(21b)が不可となると、「預かる」は「預ける」とは独立した別の構造であるということになり、両者の事象の関連性などは構造とは何の関わりもない現象であるということになる。それが正しいとして、(21b)に(21a)とは独立した構造を仮定するとなると通常他動詞構造が考えられるが、それでは「本」が対象の項として \sqrt{P} の指定部に、任意の出所「太郎から」が \sqrt{P} の補部にそれぞれ生起するため、「花子」は

⁸ Pylkkänen の提示している構造は Event Identification による構造である。

√P 内には生起できず、v の指定部に生起することとなる。v の指定部は v の素性が[+動作主性]の場合は動作主、[-動作主性, +状態]の場合には経験者が導入されるが(外崎 2003)、「預かる」は、[-動作主性, -状態]の動詞である。ゆえに、この場合は「花子」が生起する統語位置がないという問題が生じてしまうため、「預かる」に一般の他動詞構造を立てることはできない。

では次に、Pylkkänen が挙げている日本語の high applicative の例を考えてみよう。Pylkkänen はその例として間接・被害受身(gapless relative)を挙げており、その構造として(22)を提示している。

(22) 太郎が花子に新興宗教を始められた。



(Pylkkänen 2002: 63:筆者日本語訳)

本稿では「預ける」の「～に」、「預かる」の「～が」、「かぶせる」の「～に」が high applicative によって導入されると仮定したが、それらは(22)の「被害受身」のような「被害(malfactive)」の意味素性を持つ Appl でもなく、Pylkkänen が挙げている Chaga 語の「受益(benefactive)」の意味素性を持つ Appl でもない。また、事象と結びつく形で項を導入するのが high applicative だと Pylkkänen は規定しているが、「預ける」の「～に」や「預かる」の「～が」が事象と結びつく形で導入されるということも直感的には分かりにくい。しかし、Imaizumi (2001)等が LCS 分析において「預かる」に AFFECTED という意味述語を立て、「預かる」の「～が」は事象によって影響を受ける要素であるとしていることなどからも、「預かる」の「～が」は high applicative によって事象と結びつく形で導入されると考えるのが妥当であろう。そして、「預かる」の構造に high applicative を立てることにより、v によっては導入できな

い「預かる」の主語がそれによって導入できることとなる。以上のことから本稿では1つの可能性として、(14ab)(15ab)のような構造を「預ける・預かる」「かぶせる・かぶる」の構造として提案した。Applicative以外の主要部を新たに仮定し、それによって「～に」の項を統語構造に導入するという分析の可能性も否定できないが、本稿では、従来ある要素（主要部）でどこまで構造分析が可能であるかを探ってみた。

さて、(14ab)(15ab)それぞれの音韻挿入規則は(23)と(24)である。

- (23) a. $\sqrt{\text{"azuk"}} \Leftrightarrow /azuk/$
 b. [Cause[+Acc], Appl[+Dat], v [+外項]] $\Leftrightarrow /e/ \sqrt{\text{azuk}}$ ____
 c. [Cause[+Acc], Appl[-Dat], v [-外項]] $\Leftrightarrow /ar/ \sqrt{\text{azuk}}$ ____
- (24) a. $\sqrt{\text{"kabu"}} \Leftrightarrow /kabu/$
 b. [Cause[+Acc], Appl[+Dat], v [+外項]] $\Leftrightarrow /se/ \sqrt{\text{kabu}}$ ____
 c. [v [+外項][+Acc]] $\Leftrightarrow /r/ \sqrt{\text{kabu}}$ ____

統語構造完成後、Cause、Appl、v は融合し、1つの素性の束となる。そして、(23abc)の「預ける・預かる」の音韻挿入規則のように、 $\sqrt{\text{ }}$ には/azuk/の音が入り、[+Acc の Cause, +Dat の Appl, +外項の v]の素性の束には $\sqrt{\text{azuk}}$ の後ろという環境で/e/の音が入り、そして「預ける」という形態素が形成される。また、[+Acc の Cause, -Dat の Appl, -外項の v]という素性の束には、 $\sqrt{\text{azuk}}$ の後ろという環境で/ar/の音が入り、そして「預かる」という形態素が形成される。「かぶせる・かぶる」の語形成は(24abc)の音韻挿入規則に従って行われる。

この音韻挿入規則は拡散形態論の枠組みに沿ったものだが、「預ける・預かる」「かぶせる・かぶる」のような形態的対応のある動詞の語形成（いわゆる「語彙的複合語」）は、語ごとにその音韻挿入規則を持っている。本稿では(23c)に「 $\sqrt{\text{azuk}}$ の後ろ」という環境設定をしたが、しかし、もしこの素性の束に対しての/ar/の音韻挿入が最も一般性の高いものであると言えるならば、(23c)の素性の束に環境設定なしの/ar/の音韻挿入規則を立て、例外となる語にそれらの語ごとの音韻環境を規定し、新たな音韻挿入規則を立てるという分析も可能となるだろう（「非

該当条件 (The Elsewhere Principle)」による分析。Halle and Marantz 1993:120)。いずれにせよ、このようにいわゆる「語彙的複合語」の場合に語ごとの音韻挿入規則を立てなければならないことは、一見拡散形態論の欠点のようにも思われるが、語形成を LCS によって行う立場であっても、どの LCS にどの形態素が対応するかという点で同じ問題が生じるのである。一般化はできても例外が多いというのは形態論が持つ性質の1つである。しかし、こうして単独述語にも複雑な統語構造を仮定し、拡散形態論の枠組みを採用することで、モジュール形態論の枠組みでは全く別個のものであった、いわゆる「語彙的複合語」と「統語的複合語」を統一的に分析できるようになること、さらにこのような複雑な統語構造から、述語の持つ意味情報や統語的振る舞いを説明することが可能となることは、本稿の分析の利点の1つであると言えるのではない。

以上、本稿では「預ける・預かる」と「かぶせる・かぶる」の特徴を明らかにし、その統語構造と語形成を考察、提案した。Pylkkänen が提案する Applicative head がどこまで項の導入に参加しうるのか、今後、より詳しい検討が必要である。

参考文献

- Aoun, Joseph and Yen-hui Andrey Li 1993. *Syntax of Scope*. MIT Press.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from building 20*, ed. Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 53-109. MIT Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz. 1993. Distributed morphology and the pieces of inflection. In *The view from building 20*, ed. Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 111-176. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Imaizumi, Shinako. 2001. The role of AFFECTED in lexical causative alternations in Japanese. In *Journal of Japanese Linguistics* 17: 1-28.

- 井上和子 2002 「能動文、受動文、二重目的語構文と『から』格」 *Scientific Approaches to Language*, 1: 49-76. Center for Language Sciences, 神田外語大学
- 伊藤健人 2001 「主語名詞句におけるガ格とカラ格の交替について」 『明海日本語』 6, 45-63. 明海大学日本語学会
- 影山太郎 1996 『動詞意味論』 くろしお出版.
- Matsuoka, Mikinari. 1999. Two external arguments in one clause. Handout, The second Conference GLOW in Asia, at Nanzan University September 19-22 1999.
- Pylkkänen, Liina. 1999. Causation and external argument. In *Papers from the UPenn/MIT Roundtable on the Lexicon: MIT Working Papers in Linguistics* 35, ed. Liina Pylkkänen, Angeliek van Hout, and Heidi Harley, 161-183. MIT, Cambridge, Mass.
- Pylkkänen, Liina. 2002. Introducing arguments. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- 外崎淑子 2003 『述語の統語構造と語形成 -意味役割の表示と状態述語、心理述語、使役構文からの提言-』 博士論文. 神田外語大学大学院提出.
- Ueda, Yukiko. 2002. Subject positions, ditransitives, and scope in Minimalist Syntax: A phase-based approach. 博士論文. 神田外語大学大学院提出.

259-1292

神奈川県平塚市北金目 1 1 1 7
東海大学 留学生教育センター

tonosaki@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp